慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴木桃野とその親戚及び師友(上)
Sub Title	
Author	森, 潤三郎(Mori, Junzaburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.83(411)- 118(446)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鈴木桃野とその親戚及び師友（上）

森　潤三郎

鈴木桃野は「反古の裏書」の著者として知られてゐる。この書は寫本で傳はつて居つたが、大正五年四月に三田村鳶魚氏が國書刊行會の第五期に鼠璞十種第一に收めて刊行された。わたくしは十三年の夏の頃、鈴木家から數種の書類を得て、桃野の父で藏書家として知られた白藤の事蹟を調査し、翌十四年二月本誌第四卷第一號に發表した。その際桃野の事にも言及したが、極めて概略的に過ぎなかつた。その後桃野の著述を二三熟讀する事を得、又種々參考資料を得たから、その幼少時からの經歷と、併せて親族、師友の事を本誌を借りて記述して見やうと思ふ。

桃野名は成夔、字は一足、夔は說文に「神魖也、如龍一足」とあり、字一足も之れから出たのである。桃野はその號、別に詩瀑山人、醉桃子、桃花外史、慥亭等の號がある。通稱は孫兵衞で、鈴木家の先祖書によつて、曾祖父成澄の通稱を襲いだのが分る。祖父は勘十郎成義。父は成恭、字は士敬、岩次郎と

稱し、白藤と號す。天守番、學問所勤番組頭を歷て、書物奉行に進み、永代拜謁以上の格式となつた。母は多賀谷氏、先手與力源藏安貞の女。桃野の生れた寬政十二年は、父三十四歲、母二十三歲で、父は天守番から拔擢されて、是歲新設された學問所勤番組頭になつた時である。桃野には同腹の姉と弟とがあつて、姉の名は松子、惜むらくはその生歿年を詳にしない。後に精里古賀彌助樸の三子でその嗣となつた侗庵小太郎煜に嫁し、茶溪謹一郎增を生んだ。弟は八之助と稱し、文化七年に生れ、後に小普請中西彌右衞門某の養子となつた。

鈴木家の菩提所牛込區袋町淨土宗光照寺住職小谷誠順師の盡力に依つて、わたくしは反古の裏書稿本七冊を見ることを得た。その時稿本を納めた箱の內に、遺族の書いた桃野の傳があつたのを寫して置いたから、先づそれを此處に揭げやう。

鈴木孫兵衞ハ舊幕府ノ人岩次郎藤號白ノ子ナリ諱ハ成夔字ハ一足桃野又詩瀑慥亭ノ號アリ性寡言ニシテ自ラ威嚴アリ幼ヨリ叔父多賀谷向陵翁ニ就キ書法ヲ學ビ其蘊ヲ極ム旁圖畫ヲ嗜ミテ山水ヲ善クシ人物ハ鐘馗ノ像等ニ工ナリ又鐵筆ヲモ好ミテ頗ル其雅致ヲ得タリ讀書ハ內山壺太郎ヲ師トシ夙夜黽勉シ最詩文ニ妙ナリ武技ハ弓術ニ精シト云天保十己亥年八月十四日部屋住ヨリ昌平校ノ敎授トナリ自宅來學ノ生徒ニモ讀書幷臨池ノ技ヲ敎授セリ嘉永五壬子年家ヲ嗣ギ同年甲府徽典館學頭ノ命アラントスルニ先チ病ニ罹リ十一月五日遠逝ス享年五十有三牛込光照寺ノ塋域ニ葬ル配遠山氏四男五女ヲ生ム早世スルモノ多シ二男戒虎家ヲ嗣グ著書ハ隨筆體ナル反古裏書ナルモノ五冊アリ詩集ハ少壯時ノ作一冊アリ晩年ノ作ハ其稿ヲ佚ス。

附言孫兵衛ノ姉松子ハ古賀侗菴ノ配ニシテ謹一郎ノ實母ナリ。

反古の裏書稿本は半紙版で七冊に分たれ、箱の表に

桃野先生遺稿

反古廼裏書

淨書本幷に原稿　淨本四冊　稿本七冊

とあるが、淨書本は今は無い。第一冊に口繪が四枚あり、第二冊は綴目の邊に「嘉永元戊申九月望後一日書ス」、第三冊の末に

嘉永二年己酉三月十日下二條をしるす

古きふみ讀めば、昔しの人に逢たるこゝちするとは、みな人のいふことなるが、これにも倦果たる時は、自から物語りして人に告るこそ樂しけれ、これも人なき時は、壁に向ひて獨り言ふもならぬものぞかし、詩作り歌よむも、興來らざれば能はず、この反古のうらかきはかゝる時こそよけれ、世の人する業さし置、おしき隙費してかゝる業なし玉ひぞ。

第五冊の同所に「嘉永三年庚戌雛祭る頃日永く月清らかなる日北に向へる窓の下に筆を執る。」と書いてあるから、嘉永元年の春夏の頃卽ち桃野の四十八歳から、同三年晩春頃五十歳までの間に成つたものらしい。第七冊の卷首副葉に「螳黠蟬癡同得失。男才女貌好因緣。半夜自書還自讀。燈火一爆落床前。詩瀑山人㊞」の詩が書いてある。稿本の用紙はその名の如く、すべて反古を裏返しとしたもので、それには

學、庸、論、孟、易、書、詩、禮と横に印刷し、碁盤目の罫を引き、初めに「湯淺猪之助十七」等の文字が書いてあるから、學問所か自宅かの出席簿と思はれる。

鼠璞十種に收められたのは、三村竹清氏の藏本によつたのださうであるが、三村氏本には口繪が無かつたのか、有つても都合で入れなかつたのかも知れぬが、稿本で見たあの桃野自筆の飄逸な畫四枚は入れて貰ひたかつた。

中根香亭の歿後新保磐次氏が編輯した香亭遺文に收めてある零碎雜筆二に、久貝蓼灣の「題反古裏書」詩七首が收めてある。

言或無根理必然。雨窓剪燭夜如年。平生技痒稗官史。朽腐陳々亦遠傳。
一枕書騰夢已殘。花枝結子筍成竿。詩人老去才華盡。又署新銜入稗官。
爛翻長舌得人驚。說者嗤々聽者傾。何限世間奇異事。多從才子意中生。
舊記新聞事未奇。狐妖鬼祟亦談資。豆棚細雨冷於水。夜半燈昏前席時。
螳黠蟬癡同失得。男才女貌好因緣。夜半自書還自讀。燈花一爆落床前。
歿口尾底有來由。一種警人好話頭。距似尋常遊戲筆。纔能記實便千秋。
情與文生難以詼。幾回讀去幾低徊。無如大葉麤枝處。不掩平生磊落才。

鼠璞十種所收本の最後にこの詩第一より第五までを列擧し、詩瀑山人題としてある。稿本第七冊の卷首副葉にはこの第五が記してある事前述の通りである。果して蓼灣の作か、又桃野の作を誤つて蓼灣の

作としたのか、今に至つては到底判定する事は困難であらう。

わたくしはその後桃野の著無何有鄕三卷一冊、醉桃菴襍筆二卷一冊の寫本を得た。餘り上手な寫本で無く、誤字と思はれるもの、人名などは宜い加減に似たやうな字を書いたかと思はれるものがある。帝國圖書館にもあると聞いて借覽したが、家藏本と同一寫本であつた。何處かに原本があつて、それを寫したのである事が知られる。願はくは一度原本を見ることを得て、對校を試みたいものである。それは兎も角も、無何有鄕下卷に「自述」と題して、自分の幼年期少年期の勉學の有樣が書いてあるから、以下にそれを抄出し、氣付いた事を書添えて示すとしやう。

予が幼なる時は多病にして、常に吐逆の病あり。月の中灸治と鰻藥とにてやう〳〵壯健に至るを得たり。八歳より叔氏向陵翁に隨て楷法を學ぶ。其年の暮に五字の大字を學ぶ、來春書初として會始の張出し也。終會のとき人多く聚りし中にて右の五字を書せしむ。予一字を記せず、翁側より席に畫して是を知らしむ、猶あたはず、翁是が爲に撫然たり。同じ年の春より讀書を家嚴に受く。復讀の時は北堂智願夫人助けて讀しむ。夫人は高麗翁の門人にて、頗る書史を知る。予鈍根終年にして一字を知らず、常に對書して潸然として泣く。家嚴そのよむを嫌ふと思ひて、痛く鞭策を加ふ。夫人曰、家嚴學問をもつて家より作つて名四方にしく。爾ぢ讀を厭はゞ家を出て他に行け、敢て其嫌ふ所を强ひざるなり。予是におゐて勉强讀を學ぶ。

桃野の八歳は文化四年に當る。叔氏向陵翁は、桃野生母の兄多賀谷瑛之で、字は伯華、貞吉と稱し、向陵はその號、源藏安貞の長子、四谷左門町に住し、塾を環翠堂と名づけ、書を以て知られてゐる。智

願夫人は生母多賀谷氏、法號の智願院信譽妙入大姉によつた。高麗翁は不明である。

九歳の春より寺子屋に行て俗樣書を學ぶ。是より半日の讀を廢して寺子屋に在て頑要することなれば、是程おもしろき事はなし。故に朝早く行て一日も怠懈なし。家人其好むところと思ひ、心を專にして學ばしむ。其年の暮向陵翁の宅に宿せし時、他の門弟子讀書を學ぶゆゑに、予をして復讀をなさしむ、能はず、翁辭色甚だ勵し。予慚愧にたへず、泣涕是に從ふ、翁また是が爲に撫然たり。翁の子香雲予より少なる事三つ、讀書予より敏なり。翁予が爲にその敏を稱して予を激す、予深くもつて恥とす。而して魯鈍もとの如し。家嚴その煩にたへず、予をして讀を廢せしむ。夫人傍より勸解してまた讀に就かしむ。如此こと數多たびなり。予稗史を好むこと飽食の如し。九歳の暮より痘を患ふ、稀痘なり。其歳より稗史の合卷といふもの初れり。文化四年なりお六櫛合卷の初なり其明年は双蝶々吃又平等數種出る爰におゐて楚滿人豐廣の輩漸くおとろへて三馬京山國貞春亭興子京傳馬琴豐國は元の如し予が稗史を好むを知る者數種を贈れり。予數日ならずしてみな暗んず。よつて平家物語保元平治義經記等の書を讀む。これも數日ならずして讀過す。これよりおときはふことといふ怪談を讀む、是痘瘡中より來春手習稽古はじめ頃までの業なり。予右等の書をよむ時は寢食を忘れ倦を知らず、特り大學論語におゐて一時の間もたゆる能はず。如何となれば書もと心會の處ありて面白ければなり。然るを語孟に於ては茫として一字を解する能はざれば、只苦しみて句讀を記すのみの物と思へり、豈倦を生ずるも宜べならずや。

香雲は向陵の子で、妾相原氏の生んだのであらうが、鳳林寺の過去帳を調べても、それかと思はれるものを見出さなかつた。文化四年から合卷の草紙が始まつた事は、增補靑本年表に見え、この記事また之が證據になる。お六櫛木曾仇討は山東京傳の作、歌川豐國の畫、三冊物で非常な好評を受けた。俠客雙蝶々も京傳作、豐國畫であるが、それよりも式亭三馬作、歌川國貞畫の吃又平名畫助劍の方が大當り

であつたさうである。

九歳より十二三歳まで、讀書を懈ること年々三四度づゝ、皆遺忘して始より習ひかへす事あり。其ころ書生侍遠國より來り寓する者ありて、予が復讀を助く、これにて少し先へ行ことを得て五經をよむ。稗史をこのむ事さらに甚しく、年々の著作數十種づゝ出るもの、眼を經ざるもの稀なり。故に今二十餘年を經て、人の文化年間の古稗史を藏するものを借覽するに、一覽をへざる物幾稀也。しかも記憶つよく、一度見しものは始末はさらなり、繪組迄眼中にあり、其實は畫にふかき故なり。畫は十二三歳の時、人物器械其形を畫くに似ざるものなし。往々新奇にして、人のせざる物もよくす。犬を畫くに萬狀千態盡さゞる所なし、これその一技なり。予が姉は叔氏醉雪君に隨ひて、菊竹等をならへり。また人物女繪に工にして、今に至りて戲に筆をとるに、稍見るべき物あり。予も畫を學びたく思ひしが、父母の讀書を勉めざるを怒りて許さず。ひとり竊に豐國等が風を見習ひ、日々筆を取て人形をなす。

醉雪は向陵の弟名は驥、字は仲德、丈七と稱す。兄の嗣となつて先手與力の職を襲つた。菩提所杉並町高圓寺の鳳林寺の墓石に勒した古賀侗庵撰にかゝる碑文に

好讀書綴詩、最耽繪事、長於山水、始憲章明畫、卒歸宿於清王石谷、峭蒨研秀、自成一家、居平暇輒弄筆硯以自娛、

と書いてある。松子の繪畫を學んで、人物畫に巧みであつた事がこの記で知られた。桃野の山水人物畫を善くした事は前掲遺族の書いた略傳にも見える。

予が從弟半藏擊劍を鈴木丹藏といふ人に學ぶ。予も學びたく思ひ、家嚴に曰ひしに、また讀書の妨げならんことを恐れて、猶早しとて許さず。予また俗書を習ふをいとひ、叔氏の草書を學ぶ。家嚴の許さゞらんことを恐れて、夜讀のいとま竊に學びたり。後家嚴果してこれを知りて大に禁ず。善種孺人其筆道に心あるをよみして、深く禁ぜ

ざらんを乞ふ。家嚴曰、讀書吾に及ばゝ草書を作るも猶可なり、作らざるも亦可なり。況んや讀書吾に及ばざらば、草書何の用ゆる所あらんや。已むなくば楷書歟、楷書謄寫の助けともならんかとなり。因て楷法を學び、ひそかに行草を作りしが、果して手紙を作ることも不能物となれり。然れども悔るこゝろもなくて、恬然として自得せしは、心得違にぞありける。

從弟半藏は、父成恭の親類書副本に

一甥　私姉死　聟相馬文左衞門死　三男　相馬半藏

と擧げて、病死した爲に紙を貼つて消してある、この半藏である事疑無い。鈴木丹藏は劍術の師範であるが、その流派等は未だ知るに及ばない。善種孺人は桃野の祖母内海氏で、法號善種院詣室徹性大姉によつたのである。

其後予十六歳素讀いまだ終らず、家嚴煩に堪ず、内山先生に就て學ばしむ。禮記の四の中より授かりたり。其年凹鉉の輩等素讀科に出るよしにて、日々内山に集る。予其比より少しく憤發の心出て謂らく、彼輩はみな其父不學不術の人なり、然して其子みな如彼し、予が翁は人も知れる讀書の人なり、然して其子として如此豈恥ざらんや。たとへ予恥をしらずとも、翁の恥を思はざらんやとおもひ、是より一日の懈怠なく讀書に日を終へたり。是とし寺子屋も斷り、楷法も止めたり。唯終日内山先生に從ひ復讀をなすに、讀法相違ありて苦しき事新に學ぶと同じ。射術も此年より初めたり。武藝は是が始めなれば、家嚴の遠慮の如く面白き事限りなし。然れども讀書は少しも廢することなく勉强せり。其比の素讀科は隔年なれば、十六より十七十八と復讀して、素讀甲科に登りしが、一體はあま

りよくも出來ず、其實は素讀敏捷ならず、小野竹崖、岸本梅五郎の輩には大に劣れりと自ら覺へし。然ども文字のはたらきは予を第一とすと同學のものどもいひし。果して小學輪講などをなすに、數子の輩は示蒙句解等の書をみて猶一字を解する能はず。予は是等の書を用ひずして初より頗る其義を知る。

内山先生は最初に掲げた略傳にある壺太郎である。大田南畝、唐衣橘洲等が從游した學者に内山淳時、字は丈卿、賀邸と號し、傳藏と稱した人がある。儒にして和歌を善くし、天明八年十一月九日歿し、多賀谷向陵兄弟と同じ鳳林寺に葬り、法號を常眞淳時信士といふた。その子を明時といひ、通稱を南畝は小太郎と書き、前掲鈴木家にある略傳及び鳳林寺過去帳には壺太郎と書いてある。猶この壺太郎父子に就いては、又後に述べる事とする。凹鉉は桃野の友人であるが、その人を詳にしない。

素讀科は昌平坂學問所の素讀吟味である。學問所では寛政五年十一月始めて少年の學業檢定の法を設け、十一歳以上十五歳以下には四書五經、八歳以上十歳以下には四書小學、七歳以下は各々の習ふ所に從つて熟否を試みる事になつて、是から毎年一回試驗する規定が出來た。九年十月改めて素讀科を設け、これまで十五歳以下に止めたのを、十七以上十九以下の者も許可する事とし、試驗も四書、五經、小學だけに止め、合格者には甲乙に從つて賞を賜ふ事にした。桃野が十八歳で素讀科の試を受けたとすれば、文政十四年の冬である。

小野竹崖は反古の裏書に尾崎狐の事を書いた條に、射術の師範と見えてゐる。岸本梅五郎に就ても知

る處が無い。

家嚴剪燈新話の和本を出して讀しむ、是は兒玉空々翁の傳のよし。小兒輩讀むを厭ふゆえんは、其面白からざればなり。然るを小學論語を與へて其深理を求めしむるは大に悪しとて、先其讀やすく解し易ふして眼を歡ばしむる物を授く、其書中の趣をしらしむる術なりといふ。予固より、怪談小說を好む故に、新話を見てよろこぶ甚し、その解し難き所は終日求て略其義に通ず。夫より梅陰腐談、谷響集等をよみ、搜神記、酉陽雜俎等を涉獵し、略みな其義を得たり。是より經史を讀むといへども、小說隨筆の二種に過るものはあらじと覺ゆ。今に至りて此二種癖をなす、其所以は始て面白しと覺えしゆゑなり。

兒玉空々は宿谷空々として知られてゐる。名は愼、字は默甫、空々はその號、喜太郎と稱す。故あつて兒玉と稱し、老後本姓に復した。享保二十年江戸に生れ、寛延四年から田安家に任へた。蜂屋茂橘の椎の實筆卷十二に空々自筆から寫した勤書がある。

私儀寛延四未年正月十八日新規被召出御切米現米十五石被下小十人格奥御用相勤候樣被仰付候、寶曆元未年十一月十三日御扶持方三人扶持被成下、同二申年九月二日小十人組被仰付高現米拾七石三人扶持被成下只今迄之通奥勤仕候、同五亥年正月十五日大御番被仰付高現米二拾五石五人扶持被成下、只今迄之通奥勤仕候、同十辰年十一月廿六日御近習並被仰付高百俵五人扶持被成下、同十二午年六月廿二日病身ニ付願之通歸番被仰付高百俵被成下、明和七寅年十月七日御近習番見習被仰付、高百五十俵被成下、同八卯年七月十四日御前詰被仰付候、天明五巳年二月六日御近習番被仰付高二百俵被成下、同八申年五月十四日病氣ニ付願之通小普請入被仰付御用人支配ニ罷成候、高現米貳拾五石五人扶持被成下、寛政五丑年五月十四日御近習番格奥詰被仰付、高百俵十人扶持被成下、同年八月表講釋

被仰付候、同九巳年九月朔日於御前小十人頭助被仰付、外金五兩被下置、同年九月只今迄之通表講釋被仰付候、享和元酉年一月晦日頭役助被仰付候、文化三寅年十二月十五日奥講釋被仰付候、當未年迄御奉公五十七年相勤申候。

二月十四日　　宿谷喜太郎

右は當未年とあるから、文化八年二月十四日に差出したものと思はれる。同書卷十四には空々宿谷先生行狀が收めてある。

先生姓宿谷、有故て兒玉を稱す、老後本姓に復す、名愼、字默甫、空空と號す、好浮屠て北山移文に取也、俗喜太郎と稱す、幼にして才名あり、學術を以て少年褐を解て處士より田安府に仕へ祿を賜ふ、始荻生叔達に學び、中頃中村蘭林に隨ひ、末に新川土肥元成に從ふ、爲人寡欲奇節あり、聲色に於て甚淡にして家計少も不用心、故に終身貧困せり、學を務る人に過絶す、所抄の書數百種、皆句讀批點一見して先生の書たる事知るべし、琴を幸田親益に學ぶ、親益は小野田東川に學ぶ、東川は杉浦氏と共に投化僧心越に學ぶ者也。

案上經書一卷讀竟は龕中に收む、云世間の人書案の上累々數十卷、予四目兩口三頭六臂にあらず、目の所接一卷のみ、何ぞ多を爲んと、抄書日課を立、此書何十卷日課幾頁、某年某月某日卒業すべし、其內少しく課を倍す、故に期に先だつ幾十日にして訖るべしと悅ぶ、無子、辻村氏を養て子とす、其人眼中丁字なけれ共、を不加、唯其意に任てやむ、云人の性强ゆべからずと。

享年七十七、下谷玉泉寺先塋の傍に葬。

奇帙祕卷人來借時は少しも吝惜の色なし、生面新識の人といふ共藏を傾て借與す、時有て借失すと雖悔恨の色なし、

梅堂淺野長祚の寒檠璅綴卷四に

宿谷空空翁ハ畸人ニテ、常ニハ帶モシメズ、犢鼻褌モセズ、人ト對スル時モ床ノ間ノ上ニ狗ノ寢テイタルコトナドアリ、机間座右ニハ土器ヲ幾枚モ積カサネテ、夫ヲホチホチト齧テ書ヲヨミ居タリ、伊(井)川東海ハソノ門人ニテ琴ヲモ學ビツ、前ニ香案ヲ置、身ニ鶴氅ヲ着テ、夜闌月明ナルトキ彈シスマシヌ、又書ヲモ能セリ。

文化九年七月二十一日歿す、年七十七。淺草北淸島町白泉寺に葬り、法號を寬隆院義山空空居士といふ。白藤も空空に儒を學んで我が師と稱してゐる。

小兒に剪燈新話等を讀ませる事は、桃野隨筆には篠本竹堂の說として記されてゐる。竹堂名は廉、字は子溫、通稱は久兵衞、本姓は佐治、出で丶篠本氏を嗣ぐ。井上金峨に學び、文を善くし、又書法に通ず、明和九年四月大番與力となり、寬政五年六月新設の直右筆所附に擢でられ、文化元年三月十三日御目見格に進み、六年九月五日歿す、年六十四、四谷榮林寺に葬り、法號を本來院空解日中居士といふ。榮林寺は明治になつて廢せられたが、竹堂の墓は幸に雜司谷法明寺墓地に改葬せられた。白藤も先輩として先生を以て稱してゐる。

儒者の因みで此處に書くが、佐藤一齋と白藤と交際のあつた事は、一齋夫人の日記で知られるが、桃野も學問所の關係以外に心易く交はつたものと思はれる。弘化元年桃野は明人の書卷を一齋に贈つて題言を求めた。愛日樓全集卷之三十二、題跋七に

題桃野子卷甲辰

桃野子寄茲卷索題、夫書心畫也、可以觀其爲人之慨矣、人之與骨共朽、而蹟獨永存、卽賢否、卽强弱於此乎可考焉、今觀斯蹟、一副精神躍々生動、殆與朱舜水延平相髣髴、則大新之爲人可推矣、至其履歷則侗菴旣已道之、不須復贅。

とある。

桃野の小說に就いては、一部の纏まつた作の所見は無いが、反古の裏書稿本第五冊の末○鼠璞十種本三の中程に「幽靈のはなし」があつて、桃野が支那小說に據つて作つたものであり、同第七冊にある「やもめを立し人の事」は、諧鐸といふ小說から譯したもので、如何にも巧に面白く書かれてゐる。父白藤にも先代萩床下の場を支那小說に倣つて漢譯したのが一話一言に收めてあり、仙石騷動を水滸傳に模して作つたのが、目錄だけ椎の實筆に載せてある。隨筆癖は反古の裏書等の書になつて、わたくし達に奇事異聞を知らせてくれる事になつた。

桃野の詩に就いては

家大人南畝翁と友とし善し、年に一度或は二度づゝ會合して劇談し、或は幽谷、玉厓、穆亭、崑岡等と會して詩會をなす。予その列に入度おもひしかども、詩に能はざれば少しく恥てせず、竊に一谷、松陰と社を結び、詩を作ること每夜なり。然れども一谷は師傳なし、松陰は早合轉にて、いづれも詩に深からず。故に予も詩を學ぶといへども大に其道を誤る、皆二子の導に從ひしゆへ也。後ち穆亭等が譏に堪へず、ひとり二子の風を脫して稍正道に入。向陵翁も詩を好みて、予と詩を談ずる數々なり。亦詩に深からず、少時護園風を作し、晩北山の徒を見ならひ宋詩をなす、甚よろしからず。予は其中を取りて晩唐樊川義山を祖述し、傍樂天放翁等に及ぶ。然れども其學醇ならざ

れば、其作るところ甚よろしからず、彌穆亭等が說の誤らざるを知りて終に正道に入、品藁正聲等を學ぶ。五七律の作は今に至るまで此風を喜び、放翁誠齋を愛せず。絕句は稍時調を免かれず、最後元薩天錫等が風をこのみ、淸人の風を渾して淡泊を以て淸味ありとし、厚醇の味を愛せず。是壯年までの間種々の迷ひを生ぜし中のことなり。此比闘詩の催ありて、穆亭、翠巖、秋浪、柳溪、秋帆、拜石、鱗川、練塘、松陰、一谷予を合せて十一人、關口の龍穩庵に會し社を結びて詩を作る、野村博士、玉厓老人、崑岡等はみな評者なり。追々景山、菊圃、裕堂の輩を加へて、此社の盛なる天下第一と稱す、社名を氷雪社といふ。予は社中に於て稍劣れりと思ふなり。數敗北せしが、後にはさもなくなれり。刻苦の力は暫時の內といへども術の進むこと甚速かなり。此一條は別冊に記し置たればこゝにいはず。

と書いてある。家大人は卽ち白藤で、南畝とは先輩としてその交りは親密であつた。劇談の二字で相會すれば夜を徹しても話の盡きなかつた事が想像せられる。文學上の議論は勿論の事、人物評も出たであらう。演劇に關する話も出たであらう。南畝もかなり芝居好きであつたらしく、白藤には劇神仙壽阿彌の如き交友があり、藏書に院本數十種を有し、仙臺萩の漢譯があるのでも知られる。

白藤が開いた詩會の同人中、履歷の分つたものを次に列擧して置く。

幽谷は鈴木氏、修して鱸と書いてゐる。名は忠恕、一名は文、字は猶人、一に椿亭又櫻園と號し、分左衞門（○文左衞門と書いたのもあるが今碑文に從ふ）と稱し、幕府の徒士から出て、徒目付を勤めた。孝義錄編纂に與つて白銀十枚を賜ひ、又系譜の校訂に從ひ、文化七年朝鮮の聘を對馬に受くる時、その行に隨つて同地に赴き、十二

年四月日光山に於て東照宮二百年忌大祭擧行に當り、またその遺中に加はつた。文政十二年十二月二十四日歿す、年六十五。關口駒井町（目白舊坂）淨土宗大信寺に葬り、法號を清心院淨譽光月誓園居士といひ、墓には勝田半齋の撰文が刻してある。著書に歷史摘錦十六卷、擧知錄二十卷、閑中一適十卷、椿亭叢書六十卷、椿亭詩集五卷がある。幽谷は大田南畝の門人であつて、その交誼の親善であつた事は、南畝の著書にその名が累見するので知られる。半齋はその著半齋摘稿卷二に詩中八友歌と題して、友人八人の寸評を記し、幽谷をば「椿亭苦學惜寸陰、夜讀時見曙光侵」といふてゐる。

穆亭は山內氏、名は不明であるが、字は士德といひ、通稱を正助、また尙助とも書いてある。幽谷と同じく南畝の門人である。

玉厓は植木氏、名は巽、字は居晦、八三郎と稱し、狂詩に巧にして、半可山人を以て知られてゐる。本姓は福原氏、大番與力植木彥右衞門の養子となり、文化三年學問所の試に甲科に及第し、天保十年十一月四日歿す、年五十九。玉厓に就いては森銑三君の詳しい調査が日本及日本人第二五〇、二五一號に發表された。勝田半齋は詩中八友歌に「玉厓賦詩如鍛金、陶字汰句尤嚴森」といふてゐる。

崑岡は友野氏、名は瑛、字は子玉、霞舟と號し、崑岡はその別號、雄助と稱した。父名は盛興、源兵衞と稱し、致仕後靜古と號し、表火之番から徒押となり、文政十年致仕し、十二年十月十九日六十七歳で歿した。篁園全集卷十九に墓碣銘があるが、墓には刻されて居らぬ。霞舟初め井川東海に學び、後昌

平黌に入つた。文化十四年七月十九日儒官林大學頭衡、筑紫佐渡守孝門から

御徒押源兵衞倅　友野雄助

右文化九申年より學問所通稽古罷出候者御座候學業も相應に取廻し御用立可申者に御座候間去文化十酉年正月吉日一學奉願候例を以出役被仰渡御手當五人扶持被下置候樣仕度奉存候

と推薦され、八月二十八日學問所教授方出役を命ぜられ、手當五人扶持を賜ひ、天保十三年十月二十三日儒者見習に進み、十四年正月十九日甲府徽典館再興によりて學頭を命ぜられ、學規學則悉くその手に成り、嘉永元年までその任にあり、二年六月二十四日歿す、年五十九、谷中宗林寺に葬り、法號を得成院最正日覺居士といふ。霞舟は白藤桃野父子ともに親善であつた。寒檠璅綴卷四に

吾師霞舟友埜先生ハ、東海ニ業ヲ受テ、幼ヨリ英敏ヲ以テ聞エ、詩文口ヲ出レバ章ヲナス、年未ダ三十ナラズシテ牛門社ニ比肩スルモノ無、十餘歳ニテ痘ヲ病レケル時、熱ニ犯サレテ譫語スル、ミナ文選ノ賦ナリ、强記宏博、質問スルトコロハ夫ノ書ノ夫ノ卷夫ノ傳ニアリト指示サル、人トナリ端肅、言動苟モセズ、讌集ノ席先生坐ニアレバ、人ミナ失言隋容ナキニ至ル、詩集ハ全ク傳レドモ、文集ハ半ヲバ人ニ假シテ焚失ハレヌ

とある。帝國圖書館に霞舟詩集六冊霞舟文稿一冊を藏するが、惜かな完本で無い。別に明遠館叢書所收霞舟吟卷二卷があり、その編纂にかゝる熙朝詩薈百十卷、同續篇四卷がある。正編は內閣文庫に保存せられ、その寫と續篇とは靜嘉堂文庫に藏せられてゐる。靜嘉堂文庫にはこの他に徽典館學頭として赴任した間の詩を集めた霞舟先生峽役遺稿五卷を藏する。卷頭に嘉永六年歳次癸丑夏六月淺野長祚識、嘉永

壬午秋九月門生貝岱〇久貝蓼灣の二序、卷尾に女婿森田清行の跋がある。卷一は峽游草、卷二は奉檄集、卷三、四は借綠軒集上下、卷五は西笑集と名付けられ、卷二に桃野の贈に酬ゆる三詩が收めてある。

九日〇天保十四年八月酬鈴木桃野見贈

臥病秋草筆硯荒。今朝無句答重陽。閏年一月歸期遠。因誦君詩感慨長。

落木蕭々戰壘荒。至今邨俗廢重陽。當時客主皆黃土。峽樹川雲惹恨長。峽人之不賀重陽也自敗于川中島始也至今猶然

萬疊雲山接大荒。豈圖此地作重陽。正西富嶽東南見。始信離家道路長。

半齋は詩中八友歌に「霞舟早歳入藝林、道德文章自所任、更著鞭策日駸駸」といふてゐる。

桃野と社を結んだ一谷の事は、後の方で書かうと思ふ。

松陰は反古の裏書卷二「貴樣」と題した話を桃野に聞かせた阿部松陰であらう。その如何なる人かは未だ詳でないが、恐らく幕臣の一人であらう。宮崎成身の視聽草第百七冊、續集七卷の九に白藤の日記夢蕉中の名園參觀記を抄出してある中に、天保二年九月二十三日目黑嶋原侯別莊游記があつて、

侗菴が催に而目黑爺茶屋在方の島原侯別莊に遊ぶ、此遊已に三度目也、前日侗菴より其事告來る、早天松陰櫻墩と約して通鑑を會讀故に、其事終りて可行と野村篁園に書を以て告置〇下略

とあるので、その頃白藤や小花和櫻墩と通鑑の會讀をしてゐた事、白藤と交際のあつた事が知られる。昌平學科名錄に阿部氏が無いから、學問所には關係が無いらしい。「貴樣」の話の末に桃野が「嘉永二年三月六日桃季盛んに開きて日永きとき筆を執る」と書いて、その前に「松陰死して今十一星霜を經たり、

嗚呼」とあるから、天保十年に歿した事と思はれる。清水正巡のありやなしやには、八木丹波守補矩の尼介で四郎と稱し、館柳灣の門人なる松陰があるが、此處にあるのは阿部氏の方であらう。

蘆園風は荻生徂徠一派の詩風、北山の徒は山本北山の門下を指す。

氷雪社の同人中、翠巖は設樂八三郎である。淺野梅堂が書留めた親朋字號に、「名能潛、字德光、號翠巖」とある。鈴木八兵衛の次男で、廩米百五十俵の設樂吉之助能得の養子となり、文政元年學問所の試に乙科に及第し、天保元年三月六日教授方出役を命ぜられ、十二年十二月表右筆に轉じ、某年出で、代官となり、安政二年五月勘定吟味役に進み、四年十二月二丸留守居、五年勘定吟味役再勤、文久二年三月先手弓頭、同五年先手鐵砲頭に歷任し、その年九月歿したらしい。木村芥舟の黃粱一夢卷九にその詩が揭げてある。

秋帆、柳溪は石川氏の兄弟である。父名は善、字は常師、弦次郎と稱し、旗山と號す。實は平岩六郎左衞門親充の二男、石川小左衞門安行の養子となり、采地二百十石餘を知行し、文政十二年九月五十七歲で歿した。篁園全集に旗山夫妻の墓誌銘が收められてある。旗山の長子名は安定、一に濟、字は汝楫、秋帆と號し、太郎大夫と稱す。文政五年十一月朔日、部屋住から學問所教授方出役となり、十人扶持を賜ひ、十二年十二月二十七日家督を相續し、天保元年十月二十六日小十人組に番入、二年三月五日引續き教授方出役を命ぜられ、十二年十一月腰物方に轉じ、弘化三年九月十四日歿す、年五十一、牛込寶泉

寺に葬り、法號を寛量院殿秋帆海天居士といふた。二男名は則正、一に澹（又淡とも書す）と字は若水、柳溪と號し、次郎作と稱す。嘉永四年十一月二日學問所教授方出役となり、安政五年以後は學問所稽古人詩文掛を擔任し、文久元年十二月二十七日出役頭取に進み、十人扶持を賜ひ、元治元年四月十二日歿す、年六十七、法號を柳溪院殿傑心綠澹居士といふた。寶泉寺は今市外下高田に移り、柳溪の墓のみ現存し、他は合葬されてしまつた。內閣文庫所藏の篁園全集二十卷は、野村篁園の歿後林大學頭煌の囑を受けて柳溪の編纂したもので、全部柳溪の自筆である。柳溪の詩は友野霞舟の熙朝詩薈續編に收められ、鈴木白藤の死を哭した文一篇は編者不詳金世隨筆に載せてある。

鱗川は反古の裏書卷二「水練」の條に見える川上鱗川であらう。霞舟詩集卷四にもその號が見えるが、事蹟は未詳である。視聽草續集七卷の九、夢蕉拔書中の人物に「川上重五郎、名充成、字子績、號鱗巷、野村門」があるのを、森君は鱗川と何か關係がありはすまいかと云はれた。姓も同じであるし、緣故がありさうに思はれる。

秋浪、拜石、練塘の三人は、姓を書いたのを見ないから、調べる手掛が得られぬ。

評者の野村博士名は直溫、字は君玉、篁園と號し、兵藏と稱す。大坂七手組の一人野村肥後守直元の後裔で、直元の子兵庫頭直明、直明の子六兵衞直政堀尾山城守忠晴に仕へ、堀尾家斷絕の後石川主殿頭忠總の許にあり、屢ば堀尾家再興の事を訴ふるは奇特なりとて、天和三年六月二十九日召出されて月俸

二十口を賜ひ寄合醫師に准ぜられ、八月十五日綱吉將軍に謁見し、貞享四年四月二十六日歿す、年九十六、駒込養源寺に葬り、後代々葬地と定めた。直政勝次郎直次を生み、直次傳左衞門直仍を生む。直仍二子共に先立て死んだから、書物奉行比留勘右衞門正武の次男を養つて傳左衞門直超と稱せしめた。直超寛政九年十一月二十八日致仕して、子直溫家督を相續し、同十二年四月二日學問所の試に乙科に及第して賞を受け、十三年十一月十日學問所教授方出役を命ぜられ、文化十年二月八日儒者見習となり、廩米貳百俵を賜ひ、天保三年十二月十日儒者に進み、大番上席を命ぜられ、十二年四月二十二日兩番上席に昇り、十三年十一月七日役料百俵を賜ひ、十四年六月二十九日(表向八月八日)○歿す、年六十九、法號を仁讓院殿奇峰紹雲居士といふ。篁園詩を以て稱せられ、養源寺の墓にも淸人沈屛閣の筆を以て「詩人篁園之墓」と大書し、裏面碁盤目の中に小傳が刻してあるから、序に寫して置く。

先考諱直溫字君玉別號篁園仕爲昌平儒員其先大坂七手番長野村肥後守直元子兵庫頭直明七世之孫也天保十四年癸卯三月罹病六月廿七日卒於家于時年六十九法諡仁讓葬駒籠白華山養源禪寺先塋之次嗣子皆夭養兒亦死因再養日下定有季子配於嫡女爲嗣先考晩年生一男名錫隨母遷居於麻布錫也幼而穎悟爰與義兄謀鐫石建之以垂不朽

半齋は詩中八友歌に「篁園高格萬萬尋、何啻雲外崑崙岑、厭聞草間蟋蟀吟、樓上終日兀如喑」といふてゐる。

後から加はつた三人の中、景山は楢原氏である。楢原氏として知られる者に名は克敏、字は士欽、與

兵衛と稱し、湯谷と號したのがある。普請役から出身し、西丸御賄頭に進んで、御目見以上の格となり、文政四年十一月朔日七十歳で歿し、下谷大正寺に葬られた。古賀侗庵撰の墓碣銘が侗庵全書にも事實文編にも收めてあるが、墓には刻まれてゐない。侗庵は湯谷を「幼力學、好作詩、書法可觀、射騎劍法咸臻閫奥」といふてゐる。克敏神谷氏を娶つて富太郎如壽を生んだが、二十一歳で病のため盲目となつたから、後妻梶間氏の所生次男如恒を嗣とした。如恒字は子弦、政之助と稱し、文政元年學問所の試に乙科に及第し、同二年十二月九日父の蔭及び學問出精によりて大番に列せられ、同四年大坂城守衛を命ぜられて赴任の途中、七月二十九日駿河國藤枝驛に至つて病死した。時に三十三歳で、遺骸は同地大慶寺に葬られた。篁園全集卷十九に墓誌銘があつて、墓に刻してあるや否を知らず、全集も刊本が無いから、此處にその文を載せて置く。

楢原君墓碣銘

楢原君、諱如恒、字子弦、稱政之助、西城庖正諱克之第二子也、長如壽有廢疾、故以君爲後、幼而嗜學、嘗受業於尾藤約山、文化戊寅、應試經科、賞賜銀錠、文政己卯、以蔭補大衛士、辛巳秋、將更番坂城、道罹恙、至駿州藤枝驛遂不起、是歳七月二十九日也、堋于州之大慶寺、君生於寛政己酉十月七日、得年三十有三、配吉見氏、産二男、曰彦、曰格、二女皆夭、君爲人沉重恭謹、其言訥々、若不出口、其侍疾居喪、人稱之無異辭、多通武技、傍善篆築、天賦恬靜、不慕勢利、不喜交游、暇則斂膝一室、翛然自適、君之弟如茂、來謁墓銘於余、余夙辱交誼、曷敢不諾、銘曰、馬之蹄嚙、能致騰驤、若論厥德、必在馴良、允溫之子、篤學惇行、庇蔭補隊、遠戍坂陽、修涂未半、一疾遽

亡、未由歸定、西望涕滂、如何蒼昊、降此災殃、積善之報、遣懿無疆、爰瀧貞石、刻以銘章、誰謂溢美、語短情長、

昌平學教職野邨溫撰文

是より先長子如壽は文政三年四月二日三十八歳で歿し、大正寺に葬られ、墓には篁園の撰文が刻されてあるが、全集卷十九に收めたのとは異つてゐるので、煩はしいが兩方を掲げて置く。墓には

君諱如壽、字子山、楢原其氏也、父諱克、字士欣、爲西城庖正、母藤井氏、以天明三年癸卯四月三日生君、君少而豪邁、不修邊幅、年二十一、罹疾失明、至是勵精典籍、最嗜韻語、而其恭謹坦厚、非復昔人也、有二弟曰如恆、曰如茂、友愛篤至、亦皆好學、平居有暇、使二弟遞讀經史、及古人詩、君聽之欣然、至忘寢食、君强記絕倫、一經○左側耳、則口能成誦、積之數年、腹中所藏、不知幾千卷、發而爲詩、典雅工穩、世人所推、而自視陷然、每一篇成、必就社友請正、尙有摘疵瑕告之、則從而改之、未嘗有斬吝之色、亦足以證其篤志矣、初失明也、學箏於太古田氏、夙夜勤勵、遂究奧祕、旣而聞世之瞽工、售此技以鬻金幣、慨然嘆曰、乞兒之行、吾不忍爲、終身不復彈箏、其廉介皆是矣、君春秋三十有八、病歿於飯街之寓矣、文政○背面三年庚辰四月二日也、塋于下谷大正寺先塋之次、君別號曰石門、曰玉嶼、又曰研思齋、有遺藁若干卷、藏於家、娶神谷氏、生一男、曰豐吉、早夭、後買二妾、皆無子、銘曰脫擺塵滓、瀟灑風神、哦詩滿屋、金石具陳、如何眞宰、遞褫斯人、咳唾珠玉、永世是珍、若其不朽、奚假貞珉。

江都野邨溫撰、平弘典書、弟楢原如茂建。

全集には

楢原子山墓表

文政庚辰四月二日、子山病終、其弟如茂狀行實、來乞余文銘於墓曰、其治命也、余夙辱交誼、何可峻拒、子山諱如

壽、姓楢原氏、子山其字、別號石門、又號玉嶼、西城饗正諱克字士欽之長子也、天資敏而冲和、初讀書不甚研習、年二十一罹疾失明、後此投身力學、尤刻意於詩、有遺稿千餘篇、折爲數卷、其散逸亦不知幾百篇、皆失明後所得、其勤敏可想已、子山以天明癸卯四月三日生、得年三十有八矣、葬於下谷大正寺、配神谷氏、生一男、曰豊吉、先沒、銘曰、子山之先、世家于備、上祖秀玄、職爲戎師、姓曰松田、元成其諱、委質室町、勳績赫矣、昨以沃土、思蹤常軌、子孫緜緜、三百曆紀、淨榮嗣封、政綱濯弛、鄰寶不修、國亡身圮、妻曰妙星、德音徽美、遂隱松山、藐孤奉祀、改氏楢原、降爲處士、傳及延澄、懋力耘耔、卓哉忠囿、其第二子、始徙江都、玆焉筮仕、厥孫士欽、娶藤井氏、實生子山、城東之里、禀質謹廉、敦於踐履、廢疾投閑、覃思經史、詩可以觀、豈云末技、性之所耽、工妙絕比、誰其助之、此令兩弟、左挈右提、自爲師友、日就月得、實由于此、命矣斯人、祿之不厚、齒未及强、皇天遽褫、匪有遺篇、含商嚼徵、爰選爰鐫、圖諸不朽、賸馥殘膏、足治後苟、能如之何、必黃考沒、而彌彰是、謂受祉、江都野村溫撰。

とある。

如恒の二子は皆夭したので、弟如茂が嗣となつた、これが景山であるらしい。父克敏及び二子如壽、如恒には碑文があるので分つたが、如茂が景山である事を確證すべき文獻は未だ發見出來ないので、輕輕に斷定はしないが、他に該當すべきものが無い故、如茂を景山と假定して、わたくしが調べ得た經歷を左に擧げて置く。如茂幼名を銀次といひ、後賢次と改めたらしい。字を子松といふた事は霞舟吟卷の詩注で知られる。文政十一年學問所の試に甲科四人の一人に擧げられ、三月二十七日時服二領を賜はつたことは、昌平學科名錄で知られる。儒職歷任錄に所見が無いから、學問所には關係しなかつたらしく、

官歴に就いては知る所が無い。視聽草第百七冊、續集七の九に寫してある夢蕉拔萃中、天保五年甲午三月二十日林氏別莊游記に景山が蜻蛉の脱殼の羽翼まだ健なるを捕へた話がある。勝田半齋はその詩中八友歌に「景山絶調似彈琴、高山流水多餘音」といふてゐる。侗庵が撰した湯谷の碑文中に「如茂重厚工詩、與予善」と書いて居るのを見れば、その詩は推賞すべきものであつた事が知られる。

明遠館叢書第五十二、五十三冊所收野村篁園の靜宜慚稿に子山兄弟と賦した詩が收めてある。卷一に

子山幽居分得九佳

綠蔭深掩半扉柴、夏景幽寥愜素懷、壁柳風涼扶舞燕、迎梅雨濕促鳴蛙、清香一炷薰吟骨、淡粥三匙養病骸、午枕夢回人寂寂、柿花如霰點閑階。

卷二に

聞蛙同景山賦分得四支

及此梅霖歇、群蛙聚綠池、涼宵鳴不已、靜境聽偏宜、暫默驚荷露、重呼和竹颸、忽疑敲暗佩、又似戛繁絲、蚓笛應羞巧、蟬箏敢競奇、宏聲張怒腹、急節鼓長頤、帶月通孤枕、穿烟徹薄帷、自堪占水旱、豈必問公私、未得登仙便、先求請客詩、勿言徒取鬧、亦足助幽思。

同叢書第五十四冊友野霞舟の霞舟吟卷によつて、文化四年丁卯冬至に初て子山兄弟と大田南畝宅で會見し、爾後親しい交際をした事が分り、某年中秋後の一夕兄弟と某家別業で會して詠じた詩及び子山を哭した詩を收めてある。その首卷に

至日過楢原子山并序

丁卯冬至、集大田氏石楠齋、初見子山兄弟、一見如舊、爾後每至日、必招予於其家、不忘舊也、今歲至日、亦見招、詩酒罄歡、座間走筆謾賦長句。

遷喬樓下石楠齋、至日會客雅宴開、一觴一咏興方洽、忽報楢家兄弟來、主人聞語起迎客、倉皇何止倒屐屐、大兄雙瞳黠無光、小弟垂髫纔覆額、一見已知非常人、果然出語驚衆賓、大兄朗吟小弟寫、宛似飛龍躍雲津、衆賓閑筆寂皆默、瞠目茫然無顏色、羞殺兩眼徒瑩瑩、愧汗滿面屢拂拭、與君定交實從茲、花晨月夕相追隨、貧饞相和聲如貫、唱酬幾回遞新詩、鳥兎嫌人留不住、十二年光夢中度、又値窮陰生一陽、樽前話舊首重聚、君今二毛生頭顱、小弟如兄已有鬚、吾亦當年抱奇節、疎狂由來膽氣麤、一事無成今已矣、終年偃蹇守迂愚、爲君高吟老驥詠、狂來不覺碎唾壺、君不見秦皇漢武求神仙、茂陵秋樹鎖愁煙、身後聲名且休問、眼前須倒酒如泉。

同次卷に

中秋後一夕楢原昆季邀集晁河州穆田別業二首

園池借賞恣閑游、露蟀煙蘆滿目秋、蓼岸擲竿綸影動、茅軒對局子聲幽、斷橋苔厚無人過、遠隴禾肥有雁投、坐久松間明月湧、又携茶具上扁舟。

遠郊紅暗歛斜曛、穲稏村萬頃雲、舟向月華多處繫、山於林影缺邊分、境勝偏愧詩無味、夜冷方知酒有勳、笑謝司天老太史、明朝愼莫奏星文。

哭楢原子山二首

一別悠悠阻夜臺、鳥啼花落恨難裁、劍津波冷龍空去、華表煙迷鶴未來、張籍詩高堪不朽（子山得疾而盲）伯牙絃絕有餘哀（子山善筆）寸心今日折將盡、何止愁腸纔九回。

老天何事妒奇才、一夜俄驚玉樹摧、從此人琴俱已矣、可能騷賦繼悲哉、閨中少岐生前遺子山有妾未死前出嫁之　海外珍書死後來子山託人往瓊浦買書數部死後方達　賴有士龍飛能纂述、不教遺草委黃埃、弟子松纂子山遺稿編次成。卷諸友入謀將壽於梓以傳

大正寺は幕末の名士川路左衞門尉聖謨の墓があるので知られ、門前に東京府の史蹟標が建てられてゐる。墓地の中央邊に北面した「故西城御賄頭湯谷楢原君墓」と、南側トタン塀に接して西面した「楢原子山墓」とは直ぐに分つたが、景山のは知れない。それから寺に請ふて過去帳を見せて貰つたが、文政四年以後ので、三年以前のが無いから、子山の法號が知れないのは遺憾である。その內から婦女のは省略して、男子のみを抄出すれば、文政四年の條に

八月二日　大乘院殿要義日肘居士　楢原政之助殿

とあるのは駿河で死んだ如恒、歿日は墓誌と三日の差がある。

十一月朔日　貞淸院殿圓乘日善居士　楢原與兵衞殿

とあるのは父克敏である。その後には賢次殿として童子と氷子とが二三人あるのは、景山の子と思はれる。ズツト飛んで、嘉永四年の條に

九月九日　善得院殿淸運日乘居士　楢原勇三郎殿

安政三年の條に

七月二十日　常住院殿自德日善居士　楢原彥太郎殿

慶應三年の條に

霜月十五日
冷霜院殿順覺日到居士　　楢原氏

の三人が記されてゐる。二回反覆細檢してこれだけを見出したのである。日乘、日善兩人及びその他一二の法號を刻した一墓石は、子山の一側西に西面して立つてゐる。わたくしは賢次の景山が後に勇三郎と改めたのではあるまいかと思ふが、楢原氏は數年前から無緣となり、香花を供する人も無いさうであるから、遺族の方から調べることは出來ないのは遺憾である。若し何人かの文集に景山の碑銘が發見されて、歿年法號等の斷定が出來たら幸である。景山の父兄の事は他に書く機會もあるまいと思ふから、序に此處に書くことゝした。

裕堂は木村氏、名は定蔚、字は豹文、金平と稱し、裕堂はその號、又十香散人と號す。歌人檀園木村定良の子にして、先手與力を勤め、天保四年學問所の試に甲科に及第し、七年十一月八日教授方出役となり、弘化元年十二月二十六日甲府徽典館學頭を命ぜられ、五年三月十二日歸府、嘉永四年十二月二十九日學問所勤番組頭勤方となり、安政元年四月十八日儒者見習となり、大番次席、教授方手傳を命ぜられ、手當七人扶持を賜ひ、二年九月十一日儒者に進み、大番上席手當十人扶持を賜ふ。五年九月十八日格別出精により特に永々御目見以上に列し、六年十二月十六日歿す、年五十七と儒職歷任錄にあるが、確否を知らぬ。餘談ではあるが、安政六年は學問所關係者の厄年といふべきで、正月十七日〇表向三月廿三日儒者

惠廸河田八之助興が五十七歳で歿し、七月二十六日耐軒乙骨彥四郎直寛が五十五歳で歿し、九月十七日林家第十一世大學頭燈が六十歳で卒し、同月二十四日○表向廿九日　一齋佐藤捨藏坦が八十八歳で歿した。友野霞舟の次女が裕堂の妻となつたが、一子を生んだ後大歸した事は、谷中宗林寺霞舟墓側にあるその女の墓文で知つた。わたくしは久しい前からこの定良、定蔚父子の墓地を知りたく、知人にも託し、自分でも搜索してゐるが、未だ發見出來ないのを遺憾とする。定蔚の經術に邃く、詩を善くした事は、木村芥舟の菊牕偶筆に見え、その詩も一つ擧げてゐる。

殘つた一人の菊圃も學問所出身の者と想像されるが、他書に姓を記したものを見出さないので判然せぬ。

氷雪社の詩會を開いた關口の龍隱庵は、森君の記によれば、小石川關口町の駒留橋に近く、目白臺に據つた寺で、有名な芭蕉庵はこの寺内に建てられたものださうである。桃野が最後に「此一條は別冊に記し置きたればこゝにいはず」と書いてゐるが、この別冊はどうなつたか、鈴木家には略傳にある詩集も傳はらない。此等は既に還魂紙料に化したものであらうか、若し誰人かの文庫に藏されて、一見するを得たならば如何に嬉しい事であらう。

書道に就いては

文政戊子秋七月叔氏向陵翁傷寒を患ひて、終に治することなく月の中比に逝す。同社の諸友人石川乘渓、正木槐園、

礫洲、松軒、小林萱邨、小幡桃齋の徒、予を推して群弟子を率て環翠堂に於て翁の跡を繼しむ。予不敏辭すといへども許さず、醉雪翁の小子弟次を後見して書家の名目を繼ぎ、翁所持の書畫幅を讓るべしといふ。予その任の難きを知るといへども、予今堅く辭する時は別に人の其任に當る人なし。假令有といへども予を憚りて爲さゞらんは必定なり。礫洲、松軒は高弟なり、殊に筆法予に過る遠し。然れども礫洲は初めより一家の書風也。松軒は叔氏其まゝ也といへども、一丁をおらず。故に二子は辭して其任に當らず。其餘は予にしかざる者なり。やむことを得ずして夫子の席に居りしが、自からおもへらく厚面皮にてぞありける。其中予が書と伯仲の人いくらもあり、亦來りて（原本蟲食）[illegible]をこし、予恥に堪へず辭するに能はざるを以てすれども許さず、遂に書して與ふ。此書の第一の稽古にもなるやと思ひしが、さしたる事もなく只畏縮するの宿疾となりたるのみなり。予其比は清任太夫の風に董太夫の風を加へ、香雪が徒となりし比なれば、叔氏風と異なる所多ければ格別目立ず、彼是よりよき所ありなどいふ人もあり、行書はやゝ似つこらしく書しが、楷草二體は大におとりたり。人の二體を乞ふあれば、つねに流汗背に浹かりし。篆は辭して爲さず、後篆刻を爲せしにより、より〳〵篆を爲せども、素習なければ人の前へは出し難し。隷は漢の蔡邕風をよろこび、寶物陳仲弓爍などを學び、大に得意の事もありし、實は手に入らず。楷は叔氏の歐陽法を學ばずして柳玄祕塔をなせしゆへ、其奇怪を譏る人多かりし、實によろしからざればなり。後遂に歐陽法に復して清人王文燁が法を加へ書せしに、人々其力なきをいとひ、往々爲に柳法を爲せよといふ人もありし。されどもすこしも手に入りたる方、何法にてもよろしきなり。必々變法はせぬことなり、さりとて一所に膠柱するはよろしからず、其手續ありて下より上に泝遡のほるこそよからめ。

とある。多賀谷向陵は白藤と同年に生れ、文政十一年七月十五日六十二歳で歿したが、この記でその病が傷寒であつた事が知られる。向陵は米元章の如く石癖があつて、特異な物が五個あるので五石居士の

別號があり、法號にも向陵院鐵山五石居士（過去帳に吾石とするは誤なる事明白である）といふ。鳳林寺に在る墓石に勒した古賀侗庵の碑文に據れば、向陵の書風は

夙學書於細井竹岡研精靡倦造詣深遠中間宗魯公東坡終憲章虞褚以遡鍾王是晩年定見也聲稱籍甚來請者闐咽乎戶自簪纓家洎士庶僧道修贄者且千人。

又

君門生以書成名者衆而其姪鈴木某稱特秀實紹君統以誘迪同社子弟某又爲予婦弟。

碑文の鈴木某は卽ち桃野で、向陵の歿した時は二十九歳になつてゐる。向陵には正妻が無く、妾相原氏に一男二女を生ませたが、家は弟の醉雪を以て嗣がしめた。その一男は香雪であらう。わたくしは男子がありながら弟に家を嗣がしめたのを以て、早く死んだ爲かと思つて、向陵の死する數年前からの過去帳を繰つて見たが、それらしいものが見出せなかつた。或は妾腹であるから家督に立てなかつたのかも知れない。反古の裏書卷一「魂氣天に歸る」の條に

予が叔父醉雪老人加役の吟味方を勤しが、科人をつよく詰問するとて氣上りしにや、休息所に入て其儘に打伏し、中風の病起り、半身不隨にて人事を省せず、百藥驗なく、凡一月計有けり。

とあつて、致死の病は中風であつたことが知られる。同じく侗庵の撰んだ醉雪の碑文に

兄向陵君承家（中略）養君爲嗣文化十三年爲御先手與力見習明年襲養父職爲御先手與力任火付盜賊改兩處斯職者捕得放火賊輙賞賜銀君蒙賜前後數四會官長停任故君亦罷文政十三年官試放銃君十中鵠賞賜銀二鈔天保六年再任火附盜賊改

吟味方獲盜無問罪輕重苟其言涉虛飾必研詰令吐實然後止每語人曰予較他人多所容貸但責問盜則爲特猛未嘗聽信兇賊浮言其卓識類如此○中略君疾沒以天保十年三月十五日距其生安永五年六月八日得年六十又五

とあり、法號を醉翁院古庭雪道居士といふ。醉雪香山氏を娶つて二男二女があり、長子祉、通稱は緩助といひ、父の嗣となつた。桃野の記に小子弟次とあるのは二男であらう。

同門中礫洲とあるのは清水正巡である。正巡字は士遠、夙に節義を以て自ら持し、常に唐の張巡、許遠に私淑し、名字に巡遠の二字を用ひた。礫洲はその號、別に二薊、矮竹等の號がある。通稱は英吉、後に太郎と改めた。有名な赤城先生俊藏正德の長子で、寛政十二年十一月に生れ、父の意を奉じて文武二道の奥義を窮めた。正巡の著ありやなしやの附錄に收めた子正穀の貽厥錄後篇によれば、正巡の書法は初め市河米庵に學び、後多賀谷向陵に從ひ、向陵の歿後は專ら趙子昂の書風を慕ひ、晩年遂にその神に入つたといふてある。石川以下の人々も、わたくしの知らざる處である。

此處に桃野の容姿に就いて記して置くが、桃野は美少年であつたらしい。自述に

予幼時容姿殊に美なり。十四五歳までは影を顧みて自ら憐むばかりなりしが、武藝をはじめてより日々奔走して日にやけ、眼中ばかり光りておそろしき有さまになりたり。

と書いてある。

以上自述の記事で見ると、桃野は幼年からの秀才ではなくて、所謂大器晩成の人であつた事が察せら

れる。その幼年から青年時代の事はこれで止めて、次に學問所教授方出役を命ぜられてから以後の事蹟は、嘉永五年閏二月幕府に提出した親類書の初めにある履歴書に讓つて置く。今日でも官廳に就職する時は履歴書を差出すやうに、幕府時代は由緒書、先祖書、親類書、遠類書等を規定の書式に從つて呈出する事になつてゐる。何れも用紙は半紙で、同じ紙の袋に入れ、支配宛三通と組頭宛一通と都合四冊を作ること、親類書、遠類書は半面に三人づゝ認めること等の定めがある。

高百俵五人扶持　本國下總　生國武藏　小普請組奥田主馬支配實子惣領　鈴木孫兵衛　子歳五十三

文恭院樣御代私儀父岩次郎小普請組酒井主馬支配之節天保十亥年八月四日從部屋住學問所出役被仰付出役中十人扶持被下置候旨太田備後守殿被仰渡候段主馬申渡其後父岩次郎松平美作守支配之節嘉永四亥年十二月病氣差重候ニ付跡式奉願置同月廿四日病死仕同五子年閏二月四日奉願置候通跡式無相違被下置候旨於菊之間御老中御列座牧野備前守殿被仰渡如父時小普請組松平美作守支配ニ罷成同十二月病氣ニ付學問所出役　御免之儀奉願候處同月廿日願之通學問所教授方出役　御免被成候旨阿部伊勢守殿被仰渡候段美作守申渡同七寅年正月廿二日奥田主馬支配罷成候

文恭院殿は十一代家齊將軍。酒井主馬名は忠禮、天保九年十一月二十日火消役から小普請組支配となつた。太田備後守名は資始、天保七年九月四日西丸老中から本丸に轉じた。松平美作守名は信庸、天保十五年八月二十八日火消役から小普組支配となつた。牧野備前守名は忠雅、天保十四年十一月三日京都所司代から老中に進んだ。阿部伊勢守名は正弘、十四年閏九月十一日老中に任ぜられた。奥田主馬名は

忠教、嘉永七年正月二十二日新番頭から小普請支配となつた。

桃野の墓は光照寺にあつて、棹石高三尺二寸、幅一尺一寸、厚約一尺、臺石二段。正面に

鈴木孫兵衞紀成
夔暨配遠山氏墓

と題し、右側面に

觀良院
嘉永五年六月十五日
亮池院
明治廿二年四月廿五日

と刻してあつたが、大正十二年九月一日の大震に粉碎してしまつた。過去帳によれば法號は觀良院道譽禮信居士である。これに據れば桃野の歿年月日は嘉永五年六月十五日を正しいとせねばならぬ。同年十一年十日桃野の長男彦太郎成龍が二十二歳で死んだから、次男五一成虎が父の後を嗣いだ。前記親類書の初めに嘉永五年十二月二十日桃野の出役を免ぜられ（○儒職歴任錄には十二月十五日に免ずとある）七年正月二十二日奥田主馬の支配となつたと記し、成虎の親類書には

私儀父孫兵衞小普請組松平美作守支配之節實子惣領彦太郎儀嘉永五子年十一月十日病死仕候ニ付次男惣領仕度段奉願候處同六丑年正月廿七日願之通被　仰付旨阿部伊勢守殿被仰渡候段美作守申渡奥田主馬支配之節安政二卯年三月

病氣差重候ニ付跡式奉願置同月廿三日病死仕同年六月四日願之通跡式無相違被下置旨於菊之間御老中御列座松平和泉守殿被仰渡如父時小普請組奥田主馬支配ニ罷成○下略

と書上げて、安政二年三月二十三日病死と屆出た如きは當時の慣例で、跡目相續人の都合などで、早きは十餘日遲きは二三年も死者を生者の如く粧ふ事は異とするに足らぬのである。桃野も嘉永五年閏二月四日に家督を相續して、僅四月目に歿し、十一月十日に長子成龍も死んだので、直ぐに成虎が相續しては都合の惡い事情があつて、安政二年まで引延したものであらう。遺族の手に成れる傳に、甲府徽典館學頭の命あらんとするに先立ちて死んだとあるので、學頭になる內命があつた事は確であらう。桃野は前にも述べた通りに大器晚成の人であつたから、父白藤の如く長命であつたなら、徽典館學頭から進んで儒者にもなつたであらうし、種々の著作も殘したであらうに、漸く敎授方出役になつたばかりで病死したのは、返す〳〵も惜しい事である。

桃野の長男成龍の事は詳でないが、その詩を作つたと思はれるのは、その墓も大震災に破壞したが、三角形の自然石の表面に

鈴木彥太郎紀成龍墓

と題し、裏面に

山寺秋色

葉々霜乾不自持可憐終被□(欠)風吹
秋光又作隔年客彷彿人間生別離
嘉永五年壬子十一月十日卒
享年廿二

と刻してあつたので想像出來る。次男成虎の親類書前掲老中松平和泉守乗全の申渡の次に

萬延元申年十二月廿四日小普請組能勢熊之助支配ニ罷成文久二戌年二月八日蕃書調所飜譯筆記方出役被仰付出役中五人扶持被下置候旨久世大和守殿被仰渡候段熊之助申渡其後段々支配替小普請組高力直三郎支配之節慶應二寅年八月九日海軍奉行並支配罷成同三卯年十月廿四日御留守居支配罷成候

とある。能勢熊之助名は賴富、萬延元年十二月二十四日火消役から小普請組支配になつた。高力直三郎名は不明、慶應元年日付から小普請支配に轉じた。

戎虎に就いては猶本篇最後に書くことゝする。

以上を以て桃野の經歷の概要を說き盡した。引用した自述の文には、未だ食物の嗜好の事が殘つてゐる。

予幼より飽食に於て淡如たり。然れども固より一物も嫌ふ所なし、只鴨、鰹、鰻鱺の三物に於て一も好むところなし。予謂らく、諸人の美とする所にして予ひとり好まず、强て喰ふは益なしと思ひ、遂に嫌ひとして食はず、予が嗜む所は甘藷を第一とす、豆腐これに次ぐ。萊菔と餅は大に好めり。蕎麥は飽ことをしらず。砂糖は一斤を盡す。

然れども皆つねに食つて飽ざるのみ、殊に求て食はんとするにあらず。

これで見ると、桃野は下戸であることが知られる。猶醉桃菴襍筆に壯年の頃友人と杉田の梅見に遠足した時の事を書いて、途中八景の金澤に宿泊の夜、旅宿にて練羊羹、カステイラを鉢に盛て、上等の茶を煎じて出したので、「予は酒を好まざれば、よきものを出せり、魚はまたの日いつちにても食ふべし、練羊かんの類は又得べからずとて、ひたもの食ひてけり」などゝある。

無何有鄕の狗說の中に、桃野が犬の相を見るに長ぜる事、山伏町の家から四谷左門町の多賀谷氏環翠堂に行く途中で捨犬の逸物となるべきものを見たが、鈴木家で犬を畜ふ事を好まぬため、その儘見過してしまつたと書いてある。（未完）